

スゴーカレン族村落ファイナムカオ（チェンマイ、タイ）における 関東学院サービ斯拉ーニングセンター計画を通じた 自立的で継続的な交流の在り方の研究

工学研究科建築学専攻 湯澤研究室 大田真人

研究概要

本研究は、タイ北部スゴーカレン族村落ファイナムカオのファイナムカオ教会寮に建設される関東学院の実践的教育を目的とした施設、関東学院サービ斯拉ーニングセンターを通じた自立的で継続的な交流の在り方の提案を目的とする。

タイ北部の都市チェンマイから南に170 km、ミャンマーとの国境付近に、チベット・ビルマ語派に属するスゴーカレン族村落ファイナムカオ(Ban Huai Nam Khao 【タイ語】 Tee Wa Cro 【カレン語】)がある。

ファイナムカオにはファイナムカオ教会の牧師ダウ氏によって作られた教会寮がある。この寮には自宅から学校に通うことの出来ない山岳民族スゴーカレン族の子どもたちが親もとを離れ、男女160人の幼稚園から高校生までの子どもたちが集団で生活し、学校に通い教育を受けている。ファイナムカオ教会寮と関東学院との関わりは、関東学院六浦小学校はバプテスト同盟を通じて10年前から始まり、教育支援を目的とし支援活動をおこなってきた。関東学院大学文学部比較文化学科では5年前から、交流を目的としたカリキュラムを通じて訪問している。現在では、関東学院関係者主催によるNPOや、関東学院大学学生サークルなど支援団体が増え、継続的にファイナムカオへの訪問プログラムは年に3回実施されている。

このように継続的に行われてきたファイナムカオ教会寮への訪問プログラムを関東学院の教育プログラムとして発展させ、校訓でもある「人となれ奉仕せよ」の奉仕教育を現地で体験し学ぶことを目的とした拠点施設、関東学院サービ斯拉ーニングセンターの計画が検討されてきた。そして、2005年1月、工事着工の予定となるまでに至った。

本研究では2006年8月完成予定の実施を前提とした拠点施設、関東学院サービ斯拉ーニングセンターの設計を行うと共に、サービ斯拉ーニングセンターを通じた自立的で継続的な交流の在り方の提案を行う。



ファイナムカオ、ファイナムカオ教会寮における 関東学院サービ斯拉ーニングセンターの在り方

文化、言葉、生活習慣の異なる人々が出会う時、協力し生きることとは何か。そこで生み出される将来とは何かを模索する。そこには生活している人々がいる。彼らの思いがある。そして、私たちもいる。決して一つの尺度で行動してはいけない。共に悩み、苦しむ、喜び合いながら答えを導き出していこう。

この建物はその試行錯誤を行う場である。

訪問者は、この場での体験を通じて、相手の生活を見つめながら、生活を共にし、それを通じて村落社会を知る。それは文化、習慣、規範、問題、などを理解し、学ぶ。そして、寮生や住民との交流を通じて、より多くを学び、理解しよう。それは寮生や住民においても同じであり、訪問者を知る場でもあり、交流によって知り合い、お互いを認め合う。

それらの行為は相互理解や自立性を高めていくことへとつながる。またそれは対等な関係性を形成していくことへとつながる。

ここでは、当面する問題や、これからの将来について語り合い、お互いを知り、技術や情報交換など交流を通じて相互学習をする関係性と場所を作り上げていく。また様々な世代の人々が対等な立場でこの場に参加し、より親密な関係性を築き上げていく。

そして、住人や寮生、関東学院、その他の訪問団体と相互扶助の関係性を築いていく。

この建築は様々な要求に対し、建築そのものの表情や質を変えながら、活動を受け止め、促していく。はじめは使い方も分からないが、模索しながら使い方を共に発見していく。この建築の規範、つまり使い方を共に試行錯誤しながら決めていく。その過程でお互いの関係性を理解していく。

そしてお互いの関係性そのものを示すかのように、人と建築が風景を作り出していく。この場は時に、学習の場となり、経験を蓄積する場となり、話し合いの場となり、育てる場となったりする。それは自立した風景であり、継続した風景でもある。

初めて出会う人々が、この場を使いながら、理解を深めていく。そして共に協力し合い、将来を築き上げていく、その試行錯誤の過程こそが、自立的で継続的な交流の在り方であり、両者が向き合おうとする行為そのものが交流である。

この場を通じた試行錯誤は必要不可欠な行為である。彼らと共に歩むために。



計画案概要

関東学院サービラーニングセンター（以下KGSLCとする）の在り方を基に4度にわたる現地調査、聞き取り調査などを踏まえ、計画を行っていく。現地での体験や、交流を基に、計画案が変遷されていく。その試行錯誤の中で、ファイナムカオ教会寮で生活する人々、村人、関東学院など訪問団体とのニーズを満たしながら、ふさわしい建築を模索し、形成されていく。

KGSLCはレイヤリング調査や現地での視察を基に、生活の延長上にあり、生活風景を望み、生活に密接に関係できる場を選定し、配置計画を行う。そして、交流の場として、周辺環境に考慮し、建物を構築していく。建物によって既存の動線と新規の動線は交錯し、交流のきっかけを増やす。また地面から接続する場に活動の許容できる廊下を配置させ、交流活動を促していく。建物の開口部は、内部や外部の人や活動の気配を意識できる詳細を備え、様相を変えながら、人々の参加を促す。また間仕切り壁によって、様々な機能や活動に対しボリュームを変化させ、対応する可変的な空間を提案する。

建物全体が装置であり、人の活動に対し建築が様相、質そのものを変化させながら、風景や関係性を作り上げていく。人と共に風景を生み出す建築 KGSLCを提案する。

CONCEPT

以下の視点から、ファイナムカオにおけるKGSLCの役割を明らかにし、コンセプトを導く。

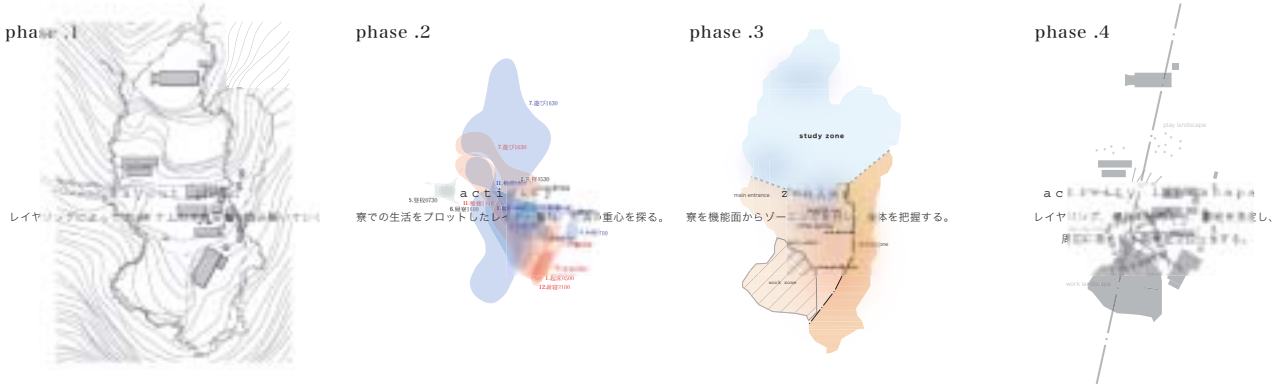
サービラーニングの在り方	サービラーニング実践における重要点	サービラーニングセンターの役割 (事例施設を参考とする)	住民参加型開発の在り方
1、学生の社会奉仕活動 2、体験と知識の学習プロセス 3、サービスと学習の互恵的な関係性 4、準備の学習プロセス 5、振り返りの学習プロセス 6、無形のもの開発	a. 支援・協力の概念の理解 b. 社会問題の理解 c. 受入れ機関とのパートナーシップ	I. 活動希望者へのマッチングとコーディネーション II. 活動団体同士のサービス業務と連絡調整業務 III. 活動団体の自立支援 IV. 実習のコーディネーション V. 学習の場の提供 VI. ワークショップの提供 VII. 外部活動団体とのマッチング VIII. 海外でのボランティアコーディネート	あ. 村落社会の理解 い. 世代やジェンダーの枠を越えた参加 う. 双方通行のコミュニケーション え. 住民の主体性 お. ドナーと途上国側のパートナーシップ

コンセプトは以下のものとする。

学びの場	生活体験を通じた相手との文化、生活、習慣、問題点、本質的要因を知り、学ぶ場 生活の延長上に存在し、建物から見える風景、建物に見える風景が、生活と密接に関係していること
交流の場	交流を通じて、教会寮の人々、現地の人々、訪問団体とが理解の深め合い、信頼関係を構築していく場 交流の場として、周辺環境との接続を考慮すること
参加の場	世代やジェンダーなどの枠を越え、対等な立場で様々な人々の参加が可能な場 参加に対する建築的表現を行うこと
実践の場	お互いにとって最適な支援や関わり方を、教会寮や、現地の人々、訪問団体と共に考え、共に実行していくための、様々なプログラムを許容できる場 様々な活動に対して対応できる可変的な建築であること

敷地の選定

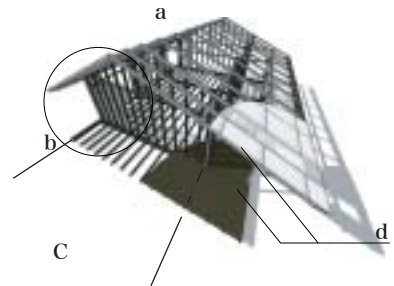
レイヤリングを基に、教会寮全体を把握し、生活と密接な関係を構築できる場所を読み取りを行い、敷地を選定する。



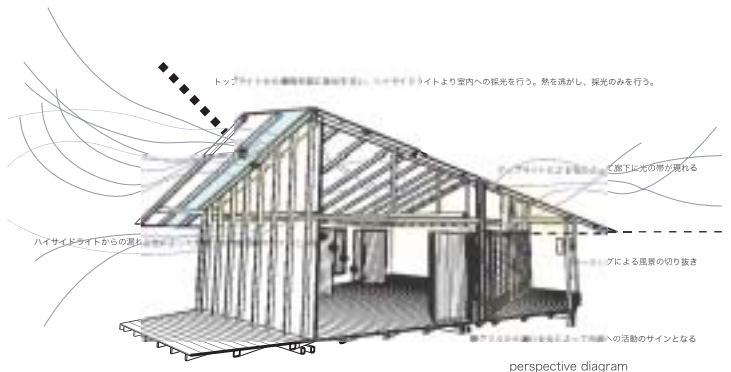
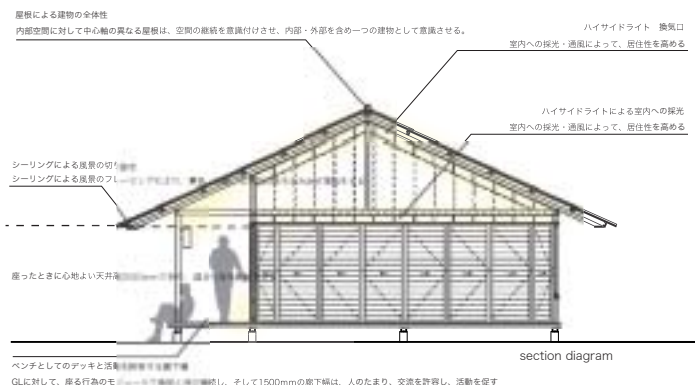
構造、工法の検討

現地の可能な技術力、自己管理可能な構法、ストック可能な素材、簡易な施工を考慮した計画を行う。

- a** コストと施工性を考慮した構造の選択
シンプルな構造と既存の工法を用いた構造を選択することで、コストダウン、施工の簡易性、自己管理可能ななどのメリットを生む
- b** 構造の裏表逆転
あえて壁の構造体を外部に出し、子どもたちの棚、靴置きとして利用し、内部を仕上げソリッドにすることで、フレキシブルな建築の空間性を表現する
- c** 建材から建築のモジュールを決定
建材からの建築のモジュールを決定し、カットの必要をなくし、コストダウン、施工の簡易性を考慮する
- d** 転用可能、ストック可能な素材選び
教会寮の建物と同じ建材を使用し、建材のストック、自己管理を行えるものを選ぶ

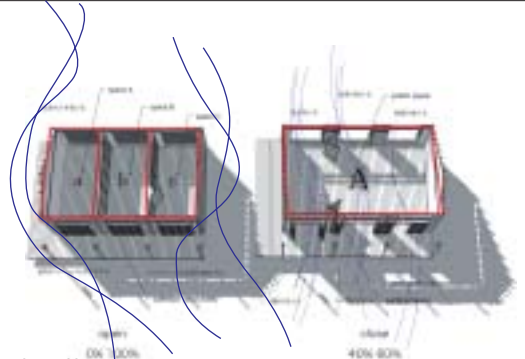


断面詳細



建築の表情

開口部、扉、間仕切壁によって、建築は様々な表情を作り出す。
規模、用途、気候などに応じて、開口部、扉、間仕切壁を操作し、建築の質そのものを変化させる。



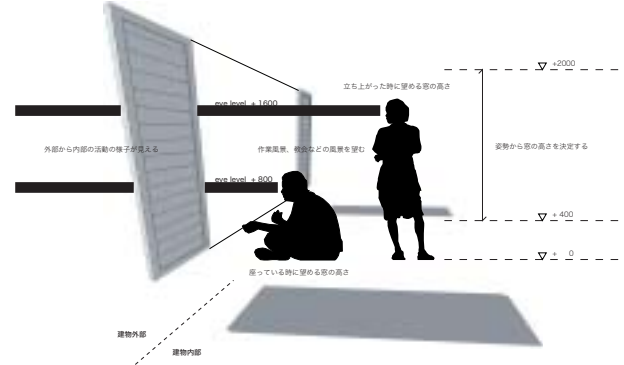
Door detail

扉の詳細を示す



Window detail

窓の詳細を示す



建築の使い方を考える

使い方の決まっていないこの建物は、教会寮の人々、村の人々、訪問団体とが、共に建物の使い方を考え、利用する。関係性や立場など、様々な要素が絡み合い、建築に表現されていく。

case 1



全面開口部を開放し、パブリックな質を持った場となる。外部、内部共に、活動を望みられ、参加を促す。

case 2



全面開口部を閉じ、プライベートな質を持った場となる。読室や勉強部屋など、閉じた空間を開口によって確保する。

case 3



パブリックとプライベートな質を同時に備えた場となる。

case 4



部屋内にパブリックとプライベートな質を同時に備える場となる。

case 5



最大、6つの部屋に分けることができ、様々な質が同時に存在する場となる。

case 6



緩やかに室内を仕切り、ファンルームの中で様々な質が同時に存在する場となる。

more..

関東学院サービスラーニングセンターを通じた今後の展望

子どもたちの将来をひろげるための協力

第3回訪問にて、打ち合わせ兼今後に向けての話し合いを行った際に、子どもたちの将来の可能性を広げる協力をして欲しいとの要望があった。それは図書館のような施設が欲しいと寮長から話から始まり、その理由として子どもたちが将来の視野を広げるための本が欲しいというものであった。教育による将来への希望、それはこの教会寮に通う根本的な理由であると思われる。山岳民族を取り巻く問題とその状況を、改善に向かう方法として教育を受けることがある。教育を受けることは、タイ語の習得、基礎教養力を養うことへとつながり、それらは将来的自立に役立つものである。子どもたちの将来の視野を広げることを教会寮の人々が強く望んでいる。

関東学院の持つ財産

支援・協力において、関東学院の特化している点は、幼稚園から大学まで、様々な専門分野の人材が集まり、関与していることによる知識量の豊富さにあると思われる。当面する問題に対して、様々な専門分野が、それぞれの視点で、それぞれの得意な方法で取り組み、それらを模索し、共に協力し合い考えることで、柔軟かつ高い専門性を備えたアプローチが可能であると思われる。

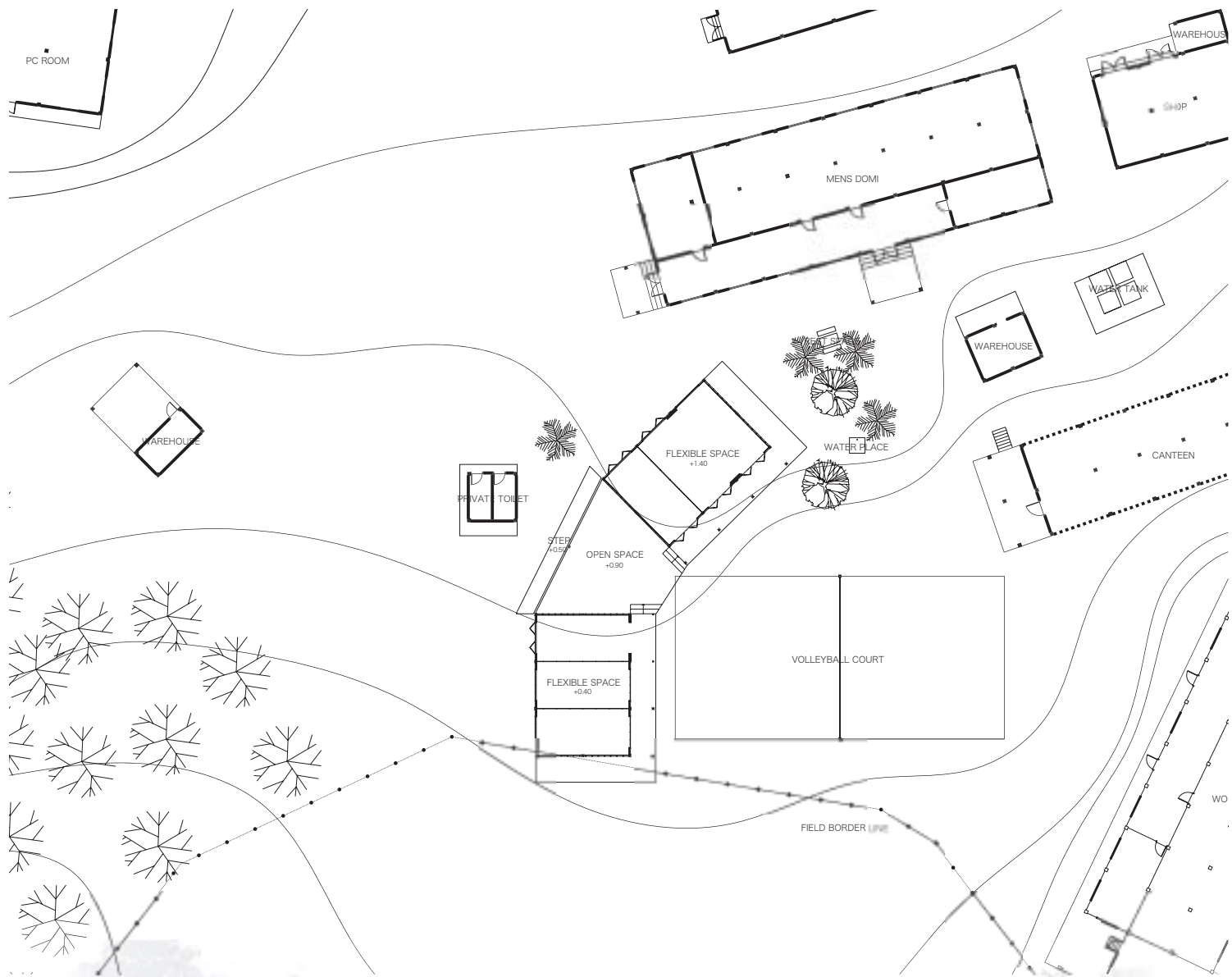
関東学院の持つ知的財産の活用とファイナムカオ学校施設との交流

関東学院の持つ知的財産を活用し、教育面で問題を抱えているファイナムカオならびにファイナムカオ教会寮への支援・協力は、有効であると思われる。事実、2005年12月、ファイナムカオ幼稚園を対象に、関東学院大学人間環境学部の学生が、シャボン玉と折り紙の授業を行った。そこでみられた風景は、無邪気に楽しむ子どもの笑顔と、それを共に楽しむ大学生の姿であった。

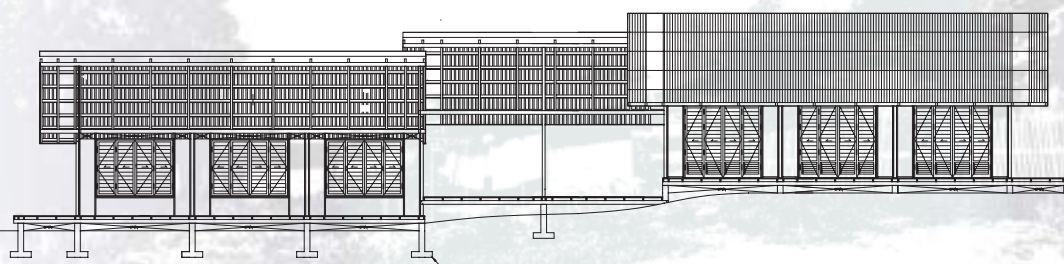
子どもたちの将来の視野を広げる直接的な影響はないかもしれない。しかし、確実に何かを感じ、何かを手に入れた充実感と、共有したこの経験は、記憶に残るものであり、教育面での協力に対し、可能性を感じることが出来たと思われる。

これまでのファイナムカオ教会寮だけを対象として行ってきた。このファイナムカオ幼稚園への授業の実施は、村の子どもたちへの支援・協力であり、交流を通じた支援・協力の効果の範囲は村へと拡大している。他村から登校しているファイナムカオの学校施設への支援・協力は、ファイナムカオや周辺の村までの影響を及ぼすことへとつながっていく。ファイナムカオ教会寮からはじまった周辺村を含めたファイナムカオとの交流は、ファイナムカオ教会寮とファイナムカオや周辺村とを関係性をより深めていくきっかけとなり、相互扶助の関係を構築することへとつながっていく。ファイナムカオ教会寮にとって、村との相互扶助の関係性の構築は、経営面での維持、管理において有利になると思われる。

相互扶助を通じて、共に協力しあひながら、自治管理能力を高め、自立的で継続的な成長、発展を可能な基盤を強固にしていくことを目指す



layout plan
1/400



section & elevation
1/200



さいごに

最後にファイナムカオ、ファイナムカオ教会寮に自治管理能力が育ったとき、関東学院やその他訪問団体などの、外部のドナー、ファシリテーターの助力は unnecessary になる。

それは自立的で継続的な発展、成長が可能な基盤がつくれ、可能になったことを意味する。

その時、再び仲間として、より良い将来を共に作り上げていきたいと願う思いが築かれ、関東学院サービスラーニングセンターでその風景が継続していれば、とても幸せである。